

古代庭園に関する研究集会 とシンポジウム

遺跡研究室は、古代庭園に関する調査研究と遺跡整備に関する調査研究を二本柱としています。今回は古代庭園に関する調査研究の現状を紹介します。

この研究は日本の古代、とくに飛鳥、奈良時代の庭園の特色と成立の背景を解明することを目的としています。このため日本国内の庭園関連遺構としては城之越遺跡(三重県上野市)など古墳時代以前の水辺の祭祀遺構を含めて検討しました(平成13年度)。平成14年度は島庄遺跡、石神遺跡など飛鳥時代の庭園遺構をとりあげました。研究の第3年度にあたる平成15年度は平城宮東院庭園など奈良時代の庭園遺構を対象として研究を進めています。その一環として平成15年12月18・19日には奈良時代の庭園遺構に関する研究集会を開催し、また、平成16年2月4・5日には中国、韓国の古代庭園と日本の古代庭園を比較検討する目的で「日本・中国・韓国の古代庭園シンポジウム」を開催しました。

近年、日本各地で発掘調査が進み、これは庭園ではないのか?というような石を使った祭祀遺跡や、飛鳥時代、奈良時代の庭園遺構も数多く発見されています。前者の研究集会は奈良時代庭園の特色を明らかにするとともに、こうした形が生まれてくる淵源を探ることをメインテーマとして討議しました。

一方、中国でも西安市にある唐長安城大明宮の庭園であった太液池の発掘調査が奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との共同でおこなわれるなど、これまでもつぱら文献をたよりに復原されて



中国広州市・南越国の庭園遺構(紀元前2世紀)

きた中国古代の庭園の姿を遺構にもとづいて考えることができるようになってきました。韓国では慶州で1975年からおこなわれた雁鴨池の発掘調査が画期的でした。その後、扶余、益山などでも古代の池が発掘調査され、情報が

豊かになってきました。そうなる、日本の古代庭園にそれぞれの国の影響があるのか、ないのか?あるとすればどのような点か?その差はどうか?などが当然問題になってきます。後者のシンポジウムは中国、韓国から研究者を招き、日本の情報とそれぞれの国の情報をお互いに共有し、上記の問題について意見交換をおこなったものです

シンポジウムでは韓国のお二人の先生に百濟地域と新羅地域の古代庭園の特色を、中国からは3名の先生をお招きし、広州南越国の庭園遺構、洛陽地域の隋唐時代の庭園遺構、唐大明宮太液池の発掘調査成果について発表していただきました。日本側も飛鳥時代、奈良時代の庭園遺構について発表し、最後に3時間にわたり上記テーマについて意見交換、討議をおこないました。その結果、お互いに納得のいくところ、問題点などを数多く確認することができました。(文化遺産研究部 高瀬要一)